

**論 文 審 査 の 要 旨**

筆頭著者（学位申請者）氏名

関根 章裕

主論文の題目  
および  
掲載・審査委員

題 目 Clinical Outcomes of Early Endoscopic Transpapillary Biliary Drainage for Acute Cholangitis Associated with Disseminated Intravascular Coagulation  
(播種性血管内凝固症候群を合併した急性胆管炎に対する早期内視鏡的経乳頭胆管ドレナージ術の臨床成績)

掲載誌 Journal of Clinical Medicine 2021;10:3606

主査 大坪 毅人  
副査 大平 善之  
副査 小林 慎二郎

[論文の要旨・価値]急性胆管炎は、重症化すると播種性血管内凝固症候群を合併し致命的となることがある。胆管炎治療の第1選択は胆道ドレナージであるが、胆道ドレナージには内瘻である内視鏡的胆管ステント留置術（以下EBS）と外瘻である内視鏡的経鼻胆管ドレナージ（ENBD）があり、いずれの方法がDIC合併急性胆管炎に適しているかは不明である。そこで申請者らはこのことを明らかとするためRetrospectiveに検討を行った。対象は62例でEBS：30例、ENBD：32例である。両群の比較は以下の通りである。総ビリルビン値(mg/dl) EBS;3.4±1.7,ENBD;6.0±3.6(P<0.01)、Tokyo Guidelines2018による重症胆管炎の程度(Mild/Moderate/Sever) EBS;2/8/20,ENBD;0/2/30(P=0.02)、APACH IIスコア EBS;11.4±3.9,ENBD;16.2±7.4(P<0.01)、SIRSスコア EBS;2.3±1.0,ENBD;2.9±1.1(P=0.04)、以上より重篤な症例にENBDが選択されていた。治療後の成績として、急性胆管炎改善率(%)EBS;96.7,ENBD;84.4(P=0.36)、DIC離脱率(%)EBS;93.3,ENBD;84.4(P=0.67)、入院期間(日)EBS;27.6±11.8,ENBD;35.6±26.9(P=0.15)、死亡率(%)EBS;0,ENBD;9.4(P=0.24)であり、両群間で差はみられなかった。以上より、本研究ではより重症例にENBDが選択されていた傾向があったが、EBSとENBDの治療成績は同等であり、症例に応じた選択が可能であると結論された。本論文は急性胆管炎の治療としてEBSあるいはENBDを選択する際に参考となる価値ある論文である。

[審査概要] 学位審査は、令和5年1月13日午後5時よりおよそ1時間、教育棟5階セミナー室において、指導教授をはじめとする1名の陪席のもと行われた。まず、申請者より20分程研究内容についての発表の後、内容について質疑応答が行われた。発表内容は簡潔にまとめられており理解しやすいものであった。副査及び主査からの研究の目的、方法、結果の解析、胆管炎によるDICの治療法に関する質問に対し、申請者は常に真摯な態度で対応し、いずれの質問に対しても的確に返答していた。

**最 終 試 験 結 果 の 要 旨**

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 英語の読解力については、引用文献の一部の音読、和訳により判断した。本審査を通して申請者は十分な研究能力、専門的な学識、英語読解力を有すると判断できた。以上より、申請者関根 章裕氏は学位授与に値すると判断した。